せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 ☎42-2590
第149号・平成14年2月1日

年表で読む 古平の歴史

《55》

海運の移り変り

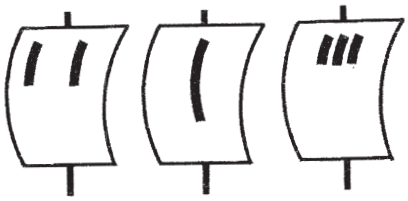
■出入港時の税金

松前藩の大きな収入は、蝦夷地に出入りする船や積み荷の税金でしたから、船の石数や荷物の検査などはかなり厳しく、また手続きもはん雑で、現在の海外旅行よりも面倒なことがあったようです。

船が入港する時は、まず、回船問屋から積み荷の帳面を役所へ持って行くと、役人が船に乗り込んで来て船改め（沖改め）をする。船の石数を確かめ、帳面と積み荷を照合する。出港の時は船底なども調べて（上り改め）、もし荷物を隠したりしていると、五分（五パーセント）増しの税金を取られた。この沖改め役所（沖改所）は、後に古平にも置かれました。

■岡田家の帆印

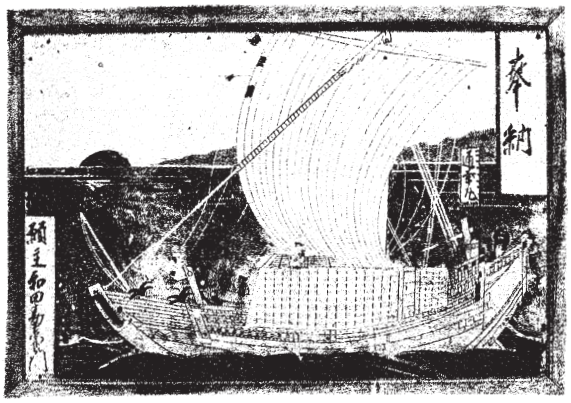
北前船には、それぞれの持ち船に特徴のある帆印がありました。岡田家のは一膳箸（いちぜんばし）と呼ばれ、帆を縦に三等分したその中央に、二本の棒を黒木綿で縫い付けたものでした。



岡田家の発祥地である近江八幡市のある郷土史研究者は、「初代が創業のころは資本も乏しい行商で、わずかに一膳の箸を持って渡り歩き、後に巨万の富を築くようになったが、子孫に残す訓戒の意味ではないか」とも言っています。

■西蝦夷地の交通

松前藩は、請負人だけに弁財船（べざいせん・べんざいせん＝北前船として使われていた和船）の使用を許していたので、東北地方からの『二八取り（にはちとり）』といわれる出稼ぎの漁夫たちは、小舟に乗って危険な海域を渡って来ました。この制限は江戸時代の終わりごろになってようやくなくなりました。



恵比須神社奉納の船絵馬

請負人はもちろん出稼ぎ漁場の業者の中にも、自家製品を安く買い取られるのをきらって、自分の船を持って本州方面へ輸送する人たちがいました。

天保元年（一八三〇）ころ沢江村に移住した仲谷石五郎は、二隻の船を持って鰊製品を輸送し、それが終わると江差～箱館間の海運も行っていたといいます。

明治になって家督を継いだ勇治郎は、建網十数か統を経営するほか、帆船や汽船古平丸など六隻を建造して海運業にも進出していました。

■古平～余市間航路

古平～余市・古平～美国間の海運は、運上屋の船によって行われていました。余市・林家の古文書（日記）に、概要、次のようなことが見られます。

※（三ページ・三段目へ続く）

大正九年

5／26　今日で半月も青空が見られない、午前中書出しを書いたが、貸し売りが一万七千円余りあった、今年は景気が良いので全部入金するだろう、午後、農園へ行って毛虫のかたまりを見つけ処分した、帰りに〆粕の干してあるのを見たが、中には腐ってどろどろに溶け、悪臭を出しているのもある、大した損害だろう。

5／27　暴風雨になった、先ほど問い合わせのあった建網のことで、厚苫の熊木まで行く、外套（がいとう）に長靴で冬まかないだ、帰りに井沼、長谷川、田中などに寄り、本漁場で休む、雨は少しも止まぬ、七時ころ家に帰る、商人は家にばかり居てはだめだ、これからはひまを見て客のところを廻り、意思の疎通を図ることが必要だ、今日一日は実に有効であった。

5／29　久しぶりの晴天になった、腐敗した〆粕をむしろ一枚分二〇銭で買うことにした、一五〇枚分で三〇円だが、これでリンゴにもたっぷり馳走してやることができる、学校の運動会が一〇日にあるとかで練習している、今日から小屋掛けして相撲が始まるので、太鼓の音が聞こえる。

5／31　農園へ行き毛虫捕りをする、随分沢山いる、札幌郡や浜益村のリンゴ園でも多くの害虫が発生しているようで、薬剤を使って駆除するようという札幌支庁からの通達が新聞にも出ている、快晴に恵まれて実に仕事もはかどる、夕方、リンゴ園を見て廻った帰途につく、小泊辺りの海岸も実に景色がよい、気も晴れ晴れするようだ、六時に家に着いた。

6／3　九時から役場で、害虫、病害予防についての講話がある、畑では　コフキゾウムムシと腐乱病が多いとのこと、快晴だが昨日から強風が吹いている、非常に暑く気温は七二度F（約二三度C）にもなっている。

6／4　刺網の客もボツボツ来る、町内の某店では昨秋刺網を仕入れたが、このごろの安値で値引きして売ったが、まだ相当手持ちがあり困っているというが、先行きを見誤るとこうなる、これからも販売の作戦を立て、勝利を得ねばならぬ。

6／5　畑では例年になく害虫がひどい、特にコナツキゾウムシ、ブランコケムシが多い、精々取ってやらないとまた広がる、町外から呉服の見切り販売に三軒も来て、盛んに売り出しをやっている。

6／7　午後から学校で、初めての国勢調査についての講話があるというので聞きに行く、道庁の係官から話があったが、国勢調査の必要なことがよく分かった。（10／1　国勢調査実施）

6／9　新聞によればシベリヤのニコラエフスク（尼港）で、シベリヤ出兵の守備隊と一般人の一二〇余名が、ソビエト兵により惨殺されたという（尼港事件）、実に悲惨なことだ、政府の責任として、議会でも大きな問題になるだろう。

6／10　小学校の運動会で、今日は大人も子どもも楽しんでいた、朝五時に花火が上がる、妻も五時ごろから起きて弁当作りをしている、忙しいが子どものいる家では楽しみもある、天気は曇り空だが風はなく、暑からず寒からずで、実に運動会には申し分のない日和だ、六十余りの種目があり、五時過ぎ無事終了した、近年にない賑やかな運動会であった。

（以下　次号）

高野名幸作さんの日記から

浜益村の世相を見る

【50】

6／1　五時に起床、農園へ毛虫取りに行く、朝露がいっぱいだ、八時に戻り朝食の後、美国へ出かける、快晴で厚苫からの景色は、活動写真（映画）で由比が浜辺りを見ているようだ、これが東京近辺なら名所になる、刺網の家を七、八軒訪ねる、いろいろと参考になることを聞いた、四時ごろがどこも花が沢山ついている、これから四、五日で花盛りだろう。

たま風の吹く季節

大澤文子

次男がまだ幼い頃、毎日のようにわが家には、若い衆がモッコを背負って大きなクロ鰈を持って来てくれたものだ。獲れたての見事な鰈だった。

「ご苦労さん！」

若い衆に声をかけると姑は、広い土間の片辺にある四角に仕切った炉に、木炭を山のように積み上げ真っ赤に火を熾こしたものだ。

平たい竹串に、その鰈を編み込むようにして刺し、炉に敷き詰められた浜の白い小石の中に一本一本差しこんだ。真っ赤に熾きた炭火をめぐり、ブチブチと音をたてて鰈はほどよく焼けていく。

「ホーラ、カレッコが焼けるヨー。」

次男を膝に抱き上げると姑は、小さな両手を火にかざしてやりながらくるくる廻し、小声で節をつけて歌うように言う。

幼子は真っ赤になったほっぺたを姑の胸に押しつけると、

「ウワァイ、ウワァイ」

と歓声をあげる。

竹串で焼いた身の厚い鰈はホカホカでおいしい。世に言うホッペタが落ちるという形容詞にあたるのではないか。

今年もまた、鰈の獲れる頃であろう。襖越しに姑の唄声が聞こえそう。

「ホーラ、カレッコが焼けるヨー」と。

【たま風】北の日本海沿岸は、北西からの冬の季節風がまともに当たる。この方向からの風を漁師の人たちは「たま風」と呼んでいる。「玉」ということは「宝」を意味し、弱い向かい風なら大漁となる風である。

※（一ページ下段から続く）

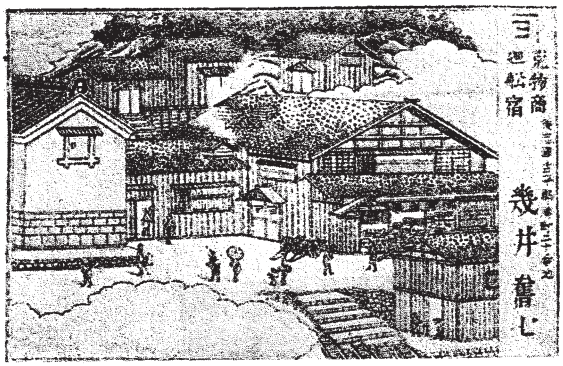
九月十九日　西風　空霞

一、今朝早く舟で、ふるひら御詰所と運上屋へ届け物をした。

一、国分煙草　五疋
一、真　綿　三十枚
一、絹　糸　四十把
一、風呂敷　二枚
一、島木綿　一反
一、手遊人形　五体

右の通り持参し差し上げ、夕方当運上屋へ帰った。

（品物の下に届け先が書いてありますが省略しました）



左上〃港町・幾井舊七
左〃入船町・広谷新三郎
（後志国盛業図録）

■古平の廻船問屋

慶応四年（一八六八）古平に移住した幾井久七と、一年後の明治二年に移住した小町安右衛門が廻船問屋をしていて、末武喜一郎が廻船宿をしていたという記録があります。

また、明治二年に北海道開拓使は、函館・幌泉・寿都・手宮の四港に海官所（後に海関所）を置いて、北海道からの移出入品から税金を徴収しました。

移入品には、その時の相場から一分五厘（一・五パーセント）、北海道産の品物は産地、その品の上・中・下を定め、三か年の平均相場から六分（六パーセント）の税額としました。

む

昔から海の安全観音さん

丘の上の観音像　大正十二年、現在の《ふるびら温泉》駐車場のところに古平小学校新地分教場が新築され、それまでの美国町への旧道も通学路として整備されました。また、鰊漁期にはがけ道を通って丸山岬の裏側に往来する人も多く、がけに沿って群来村へ通じる道路もあったといいます。

丸山中腹の丘の上、その道路の側に小さな観音像が祀られていました。これは、そこから広く海が眺望できることから、海上安全を祈って篤志の人が建てたものでした。

青峯観音堂の建設　泥の木川上流では禅源寺岳轉和尚の提唱で観音滝霊場の建設が進められ、大正一三年、観音像を安置し、岳轉和尚の歌碑を建立して入仏式が行われました。

観音滝霊場に続いて、町の東西に観音像を祀ろうということになり、岳轉和尚の勧めもあって観音堂を創建することになりました。これには信徒や一般からの寄付のほか、禅源寺とのかかわりもあったことから、岳轉和尚を先頭に祝聖会による寒修業も行われ、大正十四年、観音像の建っていた場所に、四〇平方メートルほどの観音堂が創建されました。

そして新たに観世音菩薩像を製作することになり、丸山岬海岸で見つけた石を運び出し、丸山町に住んでいた、腕が良いと評判の石工石田玉蔵が彫り、それに日本画家阿部蕉堂が彩色して完成し、安置しました。

さらに信徒も増えて、信徒は古平福聚会を結成し、初代会長に小林重吉が選ばれました。

標識灯の設置　また、福聚会では海上安全の祈願を込めて、観音堂の裏手に漁船用の標識灯を立てることにし、その費用に充てるために寒修業を行い、禅源寺では電柱六本を寄贈しました。これらの工事には福聚会会員が労力奉仕をし、観音堂が完成した翌年の大正十五年一月十六日、高い支柱の先端に赤色の標識灯が点灯したのです。

観音さんのお祭り　青峯観音は、早くから豊漁と海上安全の信仰を集めていましたが、観音堂が建立されると参詣する人も増え、九月一七日を祭礼の日と定め、その日には子ども相撲や宝探しなどの余興などもあり、狭い境内には露天も立ち並んで賑やかなお祭りでした。沿道のサクラ並木も、丸山若葉に映えてきれいでしたが、今は数も少なくなってしまいました。

観音堂を守る人たち　その後、青峯観音堂には、一般に《庚申(こうしん)さん》と呼ばれる庚申待の祭神・庚申青面(こうしんしょうめん)や、近くにあった地蔵さんも祀られています。

観音堂前には、以前、観音滝霊場の沿道に安置されていた三十三体観音像の内、第八番十一面観世音（八幡昇二・キク建立）も安置されています。

現在は信者の数や参詣する人も少なくなり、祭礼も行われなくなりましたが、毎月一七日には七、八人の人たちが集まって供養をし祭事を行っています。

＜青峯観音堂完成＞

餅搗きでお正月

竹内コト

十二月に入ると何となく心が急かされるようで、新年を迎えるというお祝い事があります。

昔の人は、年末近くになるとまず餅米の用意をして、これでやれやれ来年の正月を迎える準備ができたと、ほっとしたものです。

私の家でも子どもたちが沢山おりましたから、毎年、餅米一俵は搗きます。餅はご馳走であり、保存食でもありました。

父は、何か紋日※になると、すぐ暦を調べます。そして、大安の良き日を見計らって餅搗きの準備をします。前日から餅米をといで置き、その準備もまた大変なものでした。

火をたく前に、かまど（煮炊きをする設備・へっつい）の周囲に清めのための塩を撒き、たき木もイタヤの木を使います。

餅搗きは夜明け前から始まります。蒸し上がった蒸籠（せいろ）を手早く臼（うす）へ運ぶとすぐ次の準備に追われます。

餅を搗く人は、臼の中の餅米をまずすっかりこね、それから相取りの人と呼吸を合わせて搗きます。辺りはもうもうと湯気でいっぱいです。

ようやく餅搗きの音で目を覚ました子どもたちも起きて来て、その様子を楽しそうに見ていると、母が搗きたての餅に、黄な粉やあんこをつけて食べさせてくれました。そのときの餅の味は今でも忘れられません。

母は、一番先に臼で搗く餅を臼洗い餅と言って、その一臼の餅は全部ちぎって、子どもたちに食べさせるのが習慣です。

こうして一俵の餅は、ほとんど父と母で搗いてしまうのです。でき上がった餅を見ると、黒豆の入ったべこ餅、よもぎ餅、ごま餅など、新しいうすべり（薄縁＝敷物）に並べられ、それを見ているだけで心が豊かになったものです。

十二月になると、毎年同じことが繰り返されるのです。餅搗きも今は家庭で機械を使っていますが、昔のような臼で搗いた餅の味はなく、杵（きね）の音も聞くこともなくなりました。暮らしが便利になり、またひとつ昔の文化が消えてしまったようで、寂しい気持ちがあり、当時のことを懐かしんでおります。

※紋日＝戦前だと、祝日とか祭日のほか、暦にある季節の年中行事など、何か特別な事の行われる日を紋日（もんび）とか、物日（ものび）とか言って、それぞれの家庭でも何かをする、という習慣がありました。これが家庭や地域での楽しみのひとつでもあったわけです。

獅子座流星群

室谷忠雄

2201年11月19日午前0時、布団から起き出して空を見上げる。雲がいっぱいに広がっていて、一生涯に一度しか見ることができないかも知れない獅子座流星群は駄目か、と思いながらも窓を開け、防寒着を着込みながら天を見つめて雲の隙間を探していた。

古平沖には1隻もいないイカ釣り漁船が、美国沖では10～20隻も集結していて、明々と集魚灯を照らして操業しているので、古平の沖は真っ暗でも、古平側から見える丸山は裏側の空がボーッと明るくなっていて、丸山がくっきりと浮かんで見えるのです。

午前1時ごろ、わずかな雲の隙間からスーッと尾を引く流れ星が見えたような気がしたのです。ジーッと見ていると、雲の

三山神社（上）

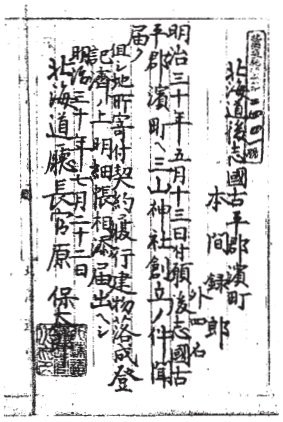
今では知る人も少なくなった三山神社（さんざんじんじゃ）について、以前、北楯幸男さんから百点を超える文書類の寄贈がありましたが、今回、工藤二三男さんが〈どんど焼き〉の日に持って来た包みの中に、その三山神社

や、丸山中腹の高台にあった水天宮のお札など、二〇数点があったのを見つけて持って来てくれました。ありがとうございます。それらの資料を元にして、三山神社について二回に分けてご紹介し、お礼に代えます。

三山神社については石碑が残っているだけで、その経緯など詳しい記録はありませんでしたが、後に、その跡に大山祇神社を建立したときの発起人の一人であった、中野仁三郎さんのお話などから概略をまとめてみました。

明治三二年、大川肇が浜町、現在、文化会館が建っている正隆寺寄りに三山神社を創建しました。三山というのは出羽三山（月山・湯殿山・羽黒山）のことで、この山岳信仰は、当時の鰊豊漁・海上安全の祈祷と深く結びついていました。

明治四二年、古平小学校を文化会館の恵比須神社寄りに増築しましたが、大正十一年、東側に校舎を増築することになったことから、町に敷地を二千円余りで売却し、同八年、神社は古平高校北側の高台（関口さん所有の土地）に移転しました。


北海道地誌　國古平郡濱町
本間錄郎
明治三十年五月十三日付願後志國古平郡濱町ヘ三山神社創立ノ件聞届ノ旨地所寄附契約履行建物落成登記ノ上明細帳相添届出ヘシ
明治三十年七月二十三日
北海道廳長官原保太郎

〈三山神社創立許可書〉

三山神社が出羽三山にゆかりのあることから、その辺りの高台は羽黒さんと呼ばれ、冬になると、この坂は子どもたちのスキー場でした。

高野名幸作さんの日記には、

「（大正八年）10／17　三山神社から大川さんが来て地祭」

「（大正九年）6／22　三山神社の祭礼、行列が町を通る。夜は提灯（ちょうちん）をつけて賑やかであった。六十六段の階段を登り参詣、角力（すもう）大会が境内で行われ賑やかであった。」

それから間もない大正十三年の末、高野名さんの日記から、

「11／15　三山神社の大川さん、かねて沢山の無尽（無尽講）をやっていたが継続できず出奔せりとのこと。話では関係者の損害五千～六千円」

こうして、大川社掌が突然いなくなってしまい、社殿だけが残ってしまいました。（続く）

隙間が徐々に広がっていくような気がします。

気のせいではなく、午前2時ごろには天空の雲も70％ほどになり、急速に晴れ間が増えているのです。

午前2時30分ころになると、満天の星空になっていました。東の空を起点にして、南へ、西へ、いたるところで流星のラッシュになっていたのです。

垂直に流れる星、水平に飛んでいく星、カメラのフラッシュか稲妻のように高光度で落ちていく星、2個同時に流れていく星を見て、この時ばかりは古平沖で集魚灯の群れが集まらないことに感謝したのです。

わが家から水平線を見ると、雄冬の山々が見えるので水平線が東側なのですが、この水平線に10も20も漁り火が灯されて空等が明るくなっていたら、生涯に一度かもしれない天空の一大ページェントは見られなかったかもしれないのです。

午前3時。上ばかり見上げていたので首が痛くなり、二階のカーテンを開けて布団の中からぬくぬくと見ていた。獅子座流星群に見とれた顛末でした。

北海道・樺太・千島を探険
最上徳内 蝦夷草紙 を読んでみましょう
〈18〉

カムサスカのこと

ウルップ（得撫）からカムサスカに行くが、大小二十一の島はすべて蝦夷地である。松前のある蝦夷本島から海を渡り、最初の島がクナシリ（国後）島で、周囲がおよそ百五十里（六百キロ）、次にエトロフ（択捉）島、周囲がおよそ三百里、次にウルップ島、シモシリ（霜知）、ポロモシリ（幌筵）、オンネコタン（温祢古丹）などの大きな島があり、四国や九州に匹敵する。

生徳四年（一七一四）、赤人たちは始めてカムサスカに来て原住民を切り従い、その後（一七七二～一七八〇）、カムサスカに城を築き、盛んにに商売をするようになった。そして二十一あるすべての島の名を改めて、そこからの産物などを税として取り、それらを都のムスクバに送っていた。

島に住むアイヌの人たちも、今はすっかり赤人の風俗に変わってしまった。赤人という異人は、わが国の領土を掠め取ろうとしているのである。このような赤人たちの振舞いはきっと問題になるだろう。私はそのためにも力を尽くしたいと思う。

南の温かい地から北の寒い地にはなかなか行きにくいが、北から南へ行き易いのは自然の理である。外人のアアレント＝ウエルレムというカピタン（長崎のオランダ商館長）も、蝦夷地の未開の様子を嘆いてこのことを感じたという。

このカピタンは今から二十年ほど前に、ボルネオ国に漂流した日本人を日本に連れ帰ったことがあり、赤人たちのことも当時の長崎の役人に話していたという。

島々の改名のことや里程、方角などは、別に地図に書いてあるのでここでは省略する。

チョウキチ国のこと

カムサスカの北にチョウキチという異国がある。緯度は北へ六十度辺りという。蝦夷でもなく、赤人でもなく、近年になって赤人を切り従え、王の名を改めてアナアデリスコイという。

この国に大河があって、アナアデリという。この河の名から国名にしたという。

この山にヲレニという獣が住んでいるが、この毛皮が実に良いものだとう。ここから北は小島続きで、年中海は氷なので船は通れない。

この国の人は山で猟をするので、犬を多く飼っている。山で猟をするときは犬を連れて行き、山中で寝るときは犬と共に寝て寒さをしのぐという。犬といっしょに寝るというようなことは一般社会にはない。

ヲレニいう獣は鹿によく似ていて、皮を見たが良いものであった。赤人がその獣の角で細工したさじを貰ったが犀（サイ）の角のようでもあった。それは今も持っている。

略　図

短歌

古平町岬短歌会

発電する風車が六基回りをり島牧の山夕映の中　池田テル

新年会はねて饒舌に帰りゆく景品のビール重たくもなく　鈴木時子

かって住みし町の温泉に浸るとき見覚えあれど声かけられず　榊佳代

つれづれに開きて見よと置き行きぬ汝が好みの治虫のマンガを　奥山きよみ

何をなすあて無きひと日横たはり昨日の夢の続きを見るむか　魚屋友子

ばらばらっと霰と雹のふりてきぬ礫のやうな凄まじき音す　竹内コト

眠れずに寝返る深夜救急車の音にとらはるる耳も心も　丹後初江

この丘に夫と吾がのみ暮し居ぬ降り積む雪に埋れはせぬか　山口スヱ

胴ふときつぼに活けたる千両の赤き実耀よふ朝の庭に　堀典子

掘りあげし三ツ葉は鉢に芽の伸びて七草粥のいろどりに摘む　東美知

それぞれに個性ゆたかに成人となりたる若きら社会に光れ　田中香苗

俳句

古平ホトトギス会

稲倉の栄華は昔枯れ木立　斉藤波留

幼き子頬染め太字書初めぬ　山口悦子

女郎子岩冬も鴎のいこう群れ　越野敏雄

高台の湯宿一軒大氷柱　大和田絵伊

看護婦に尿をとられし夜寒かな　福井幸平

裏山は子供で賑ふスキー場　関口勝志

凍て道に会釈されしは誰やらむ　よしざきり

反射して視野うばわれし雪野かな　仲谷比呂古

喉ごしのよき七種の粥を食ぶ　越野清治

路地裏の遠く太鼓の寒修行　室谷弘子

川面の声さわがしき鴨の群れ　泉清三

【先号の作者の取り違い、訂正してお詫びいたします】

㊐達磨忌に拓本の軸壁に掛け　越野敏雄

㊐出港の支度整う十二月　大和田絵伊